

中国語を母語とする日本語学習者の可能構文の誤用分析  
—作文コーパスをデータとして—  
**An Analysis of the Errors in Potential Sentences by Chinese  
Learners of Japanese: Data from the Essay Corpus**

王 辰寧

WANG Chenning

## 0. はじめに

日本語の可能構文における可能形式には、可能動詞、「動詞+助動詞（ラ）レル」、「動詞+ことができる」のように、さまざまなタイプがある。また、日本語の可能構文は、主語の有生性や動詞の意志性にも制約がある。さらに、述語動詞が他動詞の場合、格パターンが「ガ, ガ」構文と「ガ, ヲ」構文の二つの可能性を持っている。このように、日本語の可能構文は多様な形式や制約を伴うため、日本語学習者が産出する際には、様々なパターンの誤用が生じることが予測される。

これまで、日本語の可能構文の習得や誤用の問題を扱った研究は多数あるが、中国語を母語とする日本語学習者の可能構文の誤用に関する研究は未だ十分に行なわれているとは言いがたい。そこで、本稿では、『YUK タグ付き中国語母語話者日本語学習者作文コーパス 2015』Ver. 5 を用いて、中国語を母語とする日本語学習者の可能構文で見られる誤用を調査・分析し、誤用の数、そのパターンおよび誤用の原因の3点を明らかにしていく。

## 1. 先行研究のまとめと本研究の立場

### 1.1 先行研究における可能構文

本節では、現代日本語の可能構文の意味分類と可能構文における格の交替に関する先行研究を概観する。

#### 1.1.1 可能構文の意味分類

日本語記述文法研究会（2009:211）によると、可能構文とは、「動詞の語幹に「-e-ru」あるいは「-rare-ru」という接辞を付加することによって、主体がある意志的な動作を行おうとするとき、それが可能か不可能かを表すものである」とされる。

可能構文の意味に関しては、これまで多数の研究がなされてきた。例えば、日本語記述

文法研究会 (2009:280) によると、「可能構文の意味は、その動作を実現することが可能・不可能である条件・理由によって、大きく、能力可能と状況可能に分かれる。能力可能は能動主体の能力に理由があるものであり、状況可能は能動主体の能力以外に理由があるものである」とされる。また、「可能構文の意味は、その動作の実現に言及するかしないかということによって、大きく、潜在可能と実現可能に分かれる。潜在可能は、その動作を実際に行うかどうかは別にして、可能性だけを表すものであり、実現可能は動作の実現も含めて表す」とされる (同:281)。以上のような「能力可能／状況可能」、「潜在可能／実現可能」という分類が一般的であると言える。

### 1.1.2 可能構文における格の交替

渋谷 (1993) は、可能構文における格の交替を詳しく説明し、基本的には、下記のような格パターンが挙げられるとする。

- |                    |        |
|--------------------|--------|
| I. 太郎が 英語の本を 読む    | (同:43) |
| II. 太郎に 英語の本が 読める  | (同上)   |
| III. 太郎が 英語の本が 読める | (同上)   |
| IV. 太郎が 英語の本を 読める  | (同上)   |

すなわち、能動文の主語であるガ格名詞 (「太郎」) が可能構文ではニ格に降格し、「ニ、ガ」構文になるか (例 II)、能動文の目的語であるヲ格名詞がガ格に昇格し、「ガ、ガ」構文になる (例 III)、あるいは、例 (IV) のように、格の交替を起こさず、能動文の「ガ、ヲ」構文を維持する。

## 1.2 可能構文の習得・誤用に関する先行研究

市川 (1997) は、初級・中級前半程度の外国人日本語学習者 (中国、韓国、インドネシア、タイ、メキシコなど) の作文、会話などにおける誤用を分析している。可能文・「ことができる」の誤用例として、可能文においては、可能形の付加 (可能形を使うべきなのに、使っていないケース) と脱落 (可能形にしなくてもいいところで可能形を使ってしまうケース)、述語動詞の形態の誤り、可能形と自動詞などの混同、助詞の誤用 (「×を→○が」、

「×なら→○には」、「×が→○に」<sup>1)</sup>が、「ことができる」においては、その脱落や混同が見られるとする(同:169-173)。また、挙げられている誤用例を詳しく見ると、中国語を母語とする日本語学習者の誤用は特に、可能形の脱落と付加、可能形と自動詞の混同(自動詞の代わりに、可能形にしなくてもいいところで可能形を使ってしまう誤用)、助詞の誤用(「×を→○が」)が見られる。

封(2005)は、中国語を母語とする日本語学習者(日本語を専攻とする大学生37名、学習歴3年間)を対象にした調査(穴埋めテスト)に基づいて、可能の意味を含む有対自動詞の産出的能力の習得状況を調査している。その結果、他動詞「あける」と-u と-eruの対応をなす有対自動詞「あく」、主語が有情物と無情物の両方で使われうる有対自動詞「あがる」のような動詞の可能形の過剰使用が見られ、その習得が難しいことが示されている。ここから、中国語を母語とする日本語学習者が可能表現を習得する際、可能表現の特徴を把握する必要があるとする。

王(2008)は、中国人日本語学習者(日本語を専攻とする大学3、4年生、日本語専修学校上級コースの学生)の、作文における誤用を分析した研究であり、可能表現の誤用では、可能形式の過剰使用が多く見られること、誤用の原因として、中国語の可能は日本語の可能より範囲が広いという母語の干渉(負の転移)が考えられることを示している。

また、望月(2009)は、中国語を母語とする日本語学習者(在日留学生、上級レベル以上)による日本語作文コーパスをデータとして、中国語との対照の視点から、ヴォイス(動詞の自他、使役、受身、可能)の誤用分析を行っている。可能の誤用に関しては、可能の付加(使う必要がないところで使う)による誤用が顕著であり、学習者の母語と日本語の異なる点により生じる母語の干渉が誤用の原因と指摘している。

以上のような従来の研究を見ると、中国語を母語とする日本語学習者の可能構文では、可能形式の誤用と格助詞の誤用が見られる。可能形式の誤用において、目標言語(日本語)の構造そのものの理解が困難である(例えば、可能と自動詞、特に可能の意味を含む自動詞との関係がわからない)ことと学習者の母語(中国語)の干渉によって、誤用が起こるとされていることが分かる。誤用のパターンとして、特に、可能形式を使わなくてもいいところで可能形式を使ってしまう誤用が目立つ。また、市川(1997)の誤用例には、可能構文における格助詞の誤用として特に、「ヲ→ガ」(「ガ」を使うべきところで「ヲ」を使ってしまうケース)の誤用が見られる。

---

<sup>1)</sup> 「×」は誤用、「○」は正用を示す。

このように、可能構文における可能形式と格助詞の誤用にはそれぞれさまざまなパターンがあり、また、誤用の原因も多種多様であると予測される。そこで、本研究では、幅広い学習者の多様な作文データを材料として、中国語を母語とする日本語学習者の可能構文で見られる誤用のパターンや原因を再確認していく。

### 1.3 本研究の目的と方法

本研究では『YUK タグ付き中国語母語話者日本語学習者作文コーパス 2015』Ver.5 を用いて、中国語を母語とする日本語学習者の可能構文で見られる可能形式と格助詞の誤用を体系的に分析することで、誤用の実態を明らかにするとともに、その原因についても検討する。

誤用は、可能構文における可能形式（可能動詞<sup>2</sup>・助動詞「(ラ)レル」<sup>3</sup>・「ことができる」<sup>4</sup>）の誤用と「ヲ→Y」型誤用（他の助詞を使うべきところで「ヲ」を使用したケース）および「ニ→Y」型誤用（他の助詞を使うべきところで「ニ」を使用したケース）を調査し、以下の3点を明らかにする。

- 1) 可能構文における可能形式と格助詞「ヲ」「ニ」の誤用はそれぞれどれくらい起こるのか。
- 2) 可能形式と格助詞「ヲ」「ニ」の誤用は、具体的にどのようなパターンで起こるのか。
- 3) 可能形式と格助詞「ヲ」「ニ」の誤用の原因は何か。

分析にあたり、1.1.1節で挙げた日本語記述文法研究会（2009）の可能構文の二種類の意味分類に従い、次の〈表1〉のような分類を行った。

---

<sup>2</sup> 山口・秋本（2001:162）では、「可能動詞」を「五段活用動詞（四段活用動詞）が下一段活用に転じて、本来の動作内容のほかに可能の意味を含み持つようになった動詞」と定義している。これは、狭義の「可能動詞」である。一方、本稿で扱う「可能動詞」は、狭義の可能動詞のほか、山岡（2003）で指摘されている「できる」、「わかる」、「見える」、「聞こえる」のような可能の意味が既に語彙的意味に組み込まれた動詞を含むものとする。なお、「できる」にはサ変動詞の例も含む。

<sup>3</sup> 動詞未然形+「(ラ)レル」の例を指す。なお、「食べれる」のようないわゆる「ら抜きことば」もここに含める。

<sup>4</sup> 動詞連体形+「ことができる」の例を指す。

〈表1〉可能構文の意味分類

可能構文の意味分類の観点	意味分類	例文 <sup>5</sup>
動作を実現する条件・理由	能力可能	花子は関西風の料理が作れる。
	状況可能	今日は多忙で行けない。
動作の実現への言及	実現可能	私も六十歳を過ぎてようやく、その意味が理解できるようになった。
	潜在可能	あなたの電話番号もそうすれば調べられるのにね。

また、1.1.2節でも述べたように、日本語の可能構文は、「ニ、ガ」構文、「ガ、ガ」構文、「ガ、ヲ」構文という3つの文型をとる。そのため、学習者の使用例では「ガ」、「ニ」、「ヲ」の誤用が起こりうると考えられる。本稿では、中でも特に、「ヲ→Y」型誤用および「ニ→Y」型誤用に焦点を当て、調査・分析を行う。

## 2. 中国語を母語とする日本語学習者の可能構文の誤用調査

### 2.1 調査データ

調査に用いたデータは、『YUK タグ付き中国語母語話者日本語学習者作文コーパス 2015』Ver. 5 である。これは、中国の40校の大学から収集した、日本語を専攻とする日本語学習者（学習歴：3ヶ月～10年）の作文データ（日本語教育に携わっている日本語母語話者により、添削、正誤タグおよび研究タグ付与済み）である。文体は、感想文、卒業論文、修士論文などにわたっており、テーマも言語学から文学、文化、経済など、幅広い。データの総量としては、ファイル数：2,155、文字数：3,664,073、タグ数：54,828となっている。

### 2.2 「誤用」の範囲

本稿では、まずコーパスで可能構文に現れた可能動詞・助動詞「(ラ) レル」・「ことができる」、「ヲ→Y」、「ニ→Y」型誤用の例（「ヲ→Y」、「ニ→Y」の形の正誤タグが付けられた例）を、可能構文における可能形式、格助詞「ヲ」「ニ」の誤用例としてすべて収集し、それらをパターン化した。また、可能構文の誤用は、次のように、述部のみが間違っている例（A）、格助詞のみが間違っている例（B）と、格助詞だけではなく述部も間違っている例（C）に分類できる。

<sup>5</sup> 表中の例文是北京日本学研究中心（2003）『中日対訳コーパス第一版』に収録されている日本語の小説などの例をもとに筆者が作成したものであるが、すべて日本語母語話者による添削済みである。

- A. 述部の誤用
- B. 格助詞の誤用
- C. 格助詞の誤用＋述部の誤用

### 2.3 誤用例の抽出と整理

誤用例の抽出と整理の手順は、下記の通りである。

- ① コーパスのタグ情報を利用して、「可能」、「ヲ→Y」型誤用と「ニ→Y」型誤用を検索し、調査対象とする例を手作業で抽出する（格助詞の誤用で、格体制ではなく「デモ」、「サエ」などのような副助詞の使用に関わる誤用は除外した。また、「可能」と格助詞の両方の誤用で、「ヲ→Y」、「ニ→Y」型誤用以外の格助詞が混ざっている例は今回調査対象から除外した）。
- ② コーパスにおける誤用例では、1つの例文のすべての誤用箇所にタグが付与されている。分析の便宜上、「述部の誤用」の例（述部のみが間違っている例）では、可能構文の述部（可能動詞・助動詞「(ラ)レル」・「ことができる」）の誤用以外のタグを削除した。「格助詞の誤用」の例（格助詞のみが間違っている例）では、「ヲ」「ニ」の誤用以外のタグを削除した。「格助詞の誤用＋述部の誤用」の例（格助詞と述部の両方とも間違っている例）では、「ヲ」「ニ」の誤用と述部の誤用以外のタグを削除した。また、分析に関わるこれらの誤用以外の誤用箇所は、正用タグに従って修正した<sup>6</sup>。さらに、一文に誤用が二箇所以上ある場合、それぞれ1例ずつとして分析できるようにするために、一箇所だけを残して、複数の例文に分割した。
- ③ 「可能」の誤用例および「ヲ→Y」「ニ→Y」の誤用例のうち、「述部の誤用」に対し

6 例えば、コーパスにおける用例

- ① <名詞／名詞的修飾／食べ物→食べた>あと、私たちは<過剰使用／可能／遊べました→遊びました>。  
研究タグ 誤用タグ 正用タグ 研究タグ
- ② つまり、同じ金額の貨幣でより多くのもの<格助詞／を→が>買えるようになる<接続助詞／から→の>です。  
研究タグ 誤用タグ 正用タグ
- ③ 今は春<過剰使用／名詞／の且→〇>じゃありませんか、どうして雪<格助詞／を→が><可能／見える→見られる><不使用／のだ文／〇→の><不使用／終助詞／〇→か>。  
研究タグ 誤用タグ 正用タグ 研究タグ 誤用タグ 正用タグ

を、次のように修正した。

- ①' 食べたあと、私たちは<過剰使用／可能／遊べました→遊びました>。
- ②' つまり、同じ金額の貨幣でより多くのもの<格助詞／を→が>買えるようになるのです。
- ③' 今は春じゃありませんか、どうして雪<格助詞／を→が><可能／見える→見られる>のか。

て、作文コーパスの各種タグに加えて、述語動詞、動詞の自他、可能のタイプ、誤用のパターンなどの情報を付与した。「格助詞の誤用」と「格助詞の誤用＋述部の誤用」に対して、作文コーパスの各種タグに加えて、ヲ/ニの別、述語動詞、動詞の自他、可能のタイプ、誤用のパターンなどの情報を付与した。

以上の手順により作成した二つの例文集をそれぞれ分析した。

### 3. 調査結果と考察

#### 3.1 全体的な誤用の傾向

調査の結果、作文コーパスにおける可能構文の可能形式と格助詞の誤用は次の〈表2〉のようになっていることが明らかになった。

〈表2〉可能構文における誤用の全体像

誤用の分類	例数
述部の誤用	700 例
格助詞の誤用（「ヲ→Y」型、「ニ→Y」型）	113 例
格助詞の誤用＋述部の誤用	75 例
合計：	888 例

以下では、「述部の誤用」、「格助詞の誤用」、「格助詞の誤用＋述部の誤用」の順に、例を挙げながら、誤用を分析していく。

#### 3.2 述部の誤用－可能形式の「過剰」使用を中心に

まず、作文コーパスにおける可能構文の「述部の誤用」（可能形式の誤用）には、「過剰」、「欠如」、「混同」、「その他」という四つのパターンがあることが明らかになった。具体的には、次の〈表3〉のようになる。

〈表3〉誤用のパターン（「述部の誤用」）

誤用のパターン		定義	誤用例 <sup>7</sup>
欠如		可能形式（可能動詞・助動詞「(ラ) レル」・「ことができる」)を使用すべきなのに使用していない。	最後に、私は日本語で<書く→書ける>ことを嬉しく思います。(作文)
過剰		可能形式を使用する必要がないのに使用している。	私はそれを目標として、<がんばれた→がんばってきた>。(8級試験)
混同		可能形式と他のヴォイスとの混同。または可能形式の間の混同。	技術が発展するにつれて、多くの問題点が<解消できる→解消されていく>だろう。(感想文) そのほか、老人、妊婦、子供などに席を譲る若者もよく<見える→見られる>。(作文)
その他	元の動詞の誤り	可能構文は作れているが、元の動詞の選択を間違えている。(同時に可能形式が訂正されている場合も含む)	そんな偉い人にならなくても、平凡で、一生努力すれば、自己の価値も<実現できる→見出せる>と思う。(8級試験)
	述部の形態の誤り	述部で使われている元の動詞に問題はないが、可能形式の形態を間違えている。	心から勉強したい大学生はどんな所でも、何の時間でも、朝自習はなくても、精一杯<努力られる→努力できる>。(作文)
	品詞の誤り	動詞ではない語で可能形式を作っている。	中国では、「9」という数字の発音は「永久」の「久」と同じなので、「長生き」、「永遠」、「長く (<幸せできる→幸せでいる>)」という意味を連想することができ、めでたい数字だと見られている。(修論)

上記のうち、「欠如」、「過剰」、「混同」は、可能形式の有無や、他のヴォイスとの混同に関わる誤用であり、可能形式に加えて元の動詞が修正されている場合も含む。「その他」は可能構文における述部の形そのものが適切ではない誤用である。

これらのパターン別の誤用例の分布は、次の〈表4〉の通りである。

〈表4〉誤用例の分類：誤用のパターン

誤用のパターン	誤用例数	
欠如	269	38.43%
過剰	274	39.14%
混同	81	11.57%
その他	76	10.86%
合計：	700	100%

<sup>7</sup> 述部の誤用箇所が付与されている研究タグは省略した。また、括弧内に誤用例の文体を示す。

ここから、中国語を母語とする日本語学習者の可能構文における「述部の誤用」（可能形式の誤用）のパターンのうち、「過剰」、「欠如」のパターンで誤用が起こりやすく、次に「混同」、「その他」という順になっていることが分かる。

さらに、先の〈表1〉(1.3節)に示した可能構文の意味分類別に誤用例の分布を見ると、次の〈表5〉の通りである。

〈表5〉誤用例の分類：可能構文の意味

可能構文の意味分類の観点	意味分類	誤用例数		合計
動作を実現する条件・理由	能力可能	35	5.0%	700 (100%)
	状況可能	665	95.0%	
動作の実現への言及	実現可能	455	65.0%	700 (100%)
	潜在可能	245	35.0%	

ここから、中国語を母語とする日本語学習者の可能構文における「述部の誤用」は、意味から見ると、「状況可能」と「実現可能」を表す例の誤用が多いことが分かる。

以下では、可能構文における「述部の誤用」のうち、可能形式の「過剰」のパターンの例について、具体的な誤用の実態とその原因を考察していく。

まず、可能構文における可能形式の「過剰」のパターンの誤用について、可能構文の意味分類別の分布を示すと、次の〈表6〉のようになる。

〈表6〉可能形式の「過剰」の誤用の意味分類別分布

可能構文の意味分類の観点	意味分類	誤用例数		合計
動作を実現する条件・理由	能力可能	9	3.28%	274 (100%)
	状況可能	265	96.72%	
動作の実現への言及	実現可能	141	51.46%	274 (100%)
	潜在可能	133	48.54%	

〈表6〉から、可能構文における可能形式の「過剰」の誤用は、「状況可能」の意味を表す可能構文に多く見られ、また、「実現可能」と「潜在可能」の両方でほぼ同程度の誤用例が見られることが分かる。

先に見たように、通常、可能構文の「主語は有情物であり、動詞は意志動詞に限られる」とされる（日本語記述文法研究会（2009:278））。そこで、「過剰」のパターンの誤用例を分析するために、可能構文の成立条件として、それぞれの例における主語の有生性と動詞の意志性を確認しておく。

まず誤用例における主語が非情物の例は、可能表現の成立条件を満たしていない、「非情物主語を取る構文」(①)と分類した。一方、主語が有情物の場合、動詞が意志動詞か無意志動詞かを確認した。意志動詞と無意志動詞の判別方法に関して、寺村（1982:262-263）は、[-意志]の動詞、～シヨウ、～シロという形のとれないものは可能態をとることができないと指摘している。本稿では主にこの方法を用いて動詞の意志性を判別し<sup>8</sup>、動詞が無意志動詞の場合、可能表現の成立条件を満たしていない、「有情物主語の無意志動詞構文」(②)と分類した。動詞が意志動詞の場合、可能表現の成立条件を満たす、「有情物主語の意志動詞構文」(③)と分類した。以上のような可能構文の成立条件から見た「過剰」の誤用例の実態は、次の〈表7〉のようになる。

〈表7〉「過剰」の誤用例の分類

		構文のタイプ	誤用例数	
可能構文の成立条件を満たしていない場合	①	非情物主語を取る構文	100	36.50%
	②	有情物主語の無意志動詞構文	38	13.87%
可能構文の成立条件を満たしている場合	③	有情物主語の意志動詞構文	136	49.64%
合計：			274	100%

以下では、可能構文の成立条件を満たしていない場合、満たしている場合、その両方で見られる誤用の順に、「過剰」の誤用例を考察していく。

### 3.2.1 可能構文の成立条件を満たしていない場合

可能構文の成立条件を満たしていない場合の「過剰」の誤用（138例）を考察する。このケースでは、自動詞・他動詞の使い方や選択に関わる誤用が目立つ（計61例）。

まず、非情物主語を取る構文や有情物主語の無意志動詞構文で可能形式を使う誤用が見られる（計29例）。

<sup>8</sup> 誤用例の動詞が～シヨウ、～シロという形がとれるかどうかは、小泉ほか（1989）の記述に基づいて判定した。この方法で判定できなかった動詞に関しては、日本語教育に携わっている日本語母語話者により判別してもらった。なお、意志性の判定は、句のレベルで行った。これにより、例えば、「頼りになる」の「なる」は無意志動詞、「学校の学長になる」の「なる」は意志動詞となる。

(1) 修論 (0091) / 学習歴 6 年か 6 年以上 / 過剰<sup>9</sup> :

「療」祭で生ずる煙が空高く<昇れ→昇り>、雲が雨をもたらすという考え方から、また雲の神と一緒に祭ることもある。

(2) 作文 (0650) / 学習歴 2 年 / 過剰 :

親に甘えて、親の財布を<困れる→頼る>より、自分の手で好きなものを買えるほうが、私にとってもっとうれしい。

例 (1) は、主語が「煙」という非情物であり、例 (2) の「困る」は無意志動詞である。いずれも可能構文の成立条件を満たしていない。

以上のような例は、非情物主語を取る構文や有情物主語の無意志動詞構文で可能形式が使えないことを学習者が理解できていない、つまり、可能構文の成立条件の習得不足が誤用の原因だと考えられる。

また、「実現可能」の過剰使用が見られる (計 13 例)。

(3) 卒論 (0099) / 学習歴 3 年半 / 過剰 :

駅弁の掛け紙は時代を映す鏡であり、歴史書より詳しく、分かりやすい言葉で時代時代を<解説できる→解説している>。

(4) 修論 (0080) / 学習歴 6 年か 6 年以上 / 過剰 :

蘇氏の「使」兼語文には、因果関係の意味を表すものと目的の意味を表すものの二種類があることが<判明できた→判明した>。

例 (3)、(4) では、学習者は可能形式を用いて、非情物主語の「実現可能」の意味を表すことを意図していると考えられる。実際に成立した状態について述べているこれらの例では、動詞のシテイル形やシタ形を使う方が自然であると添削者は判断している。このような誤用は、可能構文の成立条件の習得不足のほか、中国語を母語とする日本語学習者の母語の負の転移も疑われる。例えば、次のような例<sup>10</sup>で考える。

---

<sup>9</sup> 以下の例文には、「文体 (ファイル番号) / 学習歴 / 誤用のパターン」の形で情報を付した。情報が欠落している場合は、「φ」で示している。また、誤用箇所が付与されている研究タグは省略した。

<sup>10</sup> 北京日本学研究中心 (2003) 『中日対訳コーパス第一版』に収録されている中国語の小説などの例を用いる。中国語原文 / 日本語訳文の形で示す。以下同様。

- (5) Tā kě yǐ fǎnyìng chū guǎng dà qúnzhòng de kàng rì rè qíng / 広はんんな大衆の抗日の情熱を、  
よく反映してるしね。 『青春之歌／青春の歌』

例(5)では、非情物主語を取る文において、中国語の“(可以) 反映”のような「可能の助動詞+動詞」という構造に対して、日本語では動詞のテイル形「反映して(い)る」が対応している。日本語では、実現可能は有情物主語の意志的動作に限られるのに対して、学習者の母語(中国語)では非情物主語の実現可能も許されるため、母語の感覚のまま、可能形式を過剰使用してしまうことで誤用が起こると考えられる。これは、学習者の母語である中国語の規則が負の転移を起こしていると解釈できる。

さらに、有対自動詞の可能形式の過剰使用が見られる(計19例)。

- (6) 作文(0164) / 学習歴1年 / 過剰:

いろいろな薬を飲んだのに熱が<下がれません→下がりません>でした。

例(6)のような有対自動詞「下がる」の例は、主語が「熱」のような非情物主語であり、かつ動詞自体が可能の意味を含意しているため、可能表現が使えない。このような例は、「いろいろな薬を飲んだのに熱を下げられませんでした」のように、変化を起こそうとする意志的な行為を表す他動詞を使えば、可能構文になる。

このような誤用は、中国語を母語とする日本語学習者にしばしば見られる、母語の負の転移による、自動詞と他動詞の選択の誤りの一つと捉えることができる。例えば、次のような例で考える。

- (7) Kě shì pǎo dào xuéxiào ménkǒu, què fā xiàn dà tiě mén shàng zhe yī bǎ dà suǒ, zěn me tuī yě tuī bù kāi / 可是, 跑到学校门口, 却发现大铁门上着一把大锁, 怎么推也推不开。  
/ しかし学校にたどり着くと、太い鎖で門が閉ざされ、押しても引いても開かない。 『轮椅上的梦／車椅子の上の夢』

例(7)のように、中国語では、状態変化の実現あるいはその可能性を表示する可能補語(“~不~”)が、他動詞だけではなく、意志的な行為者の現れることができない自動詞的な構文でも用いられる。しかし、これに対応する日本語の例では、自動詞「開く」に可

能の意味がすでに含まれているため、自動詞構文が用いられている。このような二言語内の違いに基づけば、例（6）のような誤用は、学習者の母語である中国語の規則が負の転移を起こした結果であると解釈できる。

### 3.2.2 可能構文の成立条件を満たしている場合

次に、可能構文の成立条件を満たしている場合の誤用（136 例）を見る。このケースでは、まず実現可能の過剰使用が目立つ（計 35 例）。

（8）作文（0053）／学習歴 2 年／過剰：

私は日本の現代文学作家山岡庄八の作品《徳川家康》を<読めました→読みました>。

（9）作文（0635）／学習歴 2 年／過剰：

でも、幸せの瞬間は忘れ<られ→〇>ません。

可能構文の意味用法の一つである「実現可能」（1.1.1 節）は、特に過去形を用いて、実際に動作が実現したことを表す。例（8）、（9）は、可能構文の成立条件を満たしている文であるが、例（8）は実現可能と解釈されると、「ようやく読むことができた」のようなニュアンスを帯びてしまう。この文脈では特にそのようなニュアンスが感じられないため、誤用と判定されている。非過去形の例（9）は、「幸せの瞬間」が特定の人に起こった事態であれば可能構文になりうるが、この例は一般論として述べている文脈であるため、可能形式の過剰使用だと判定されている。このように、実現可能を表現してはいけないところで可能形式を使ってしまうのは、実現可能の使用の可否の判断が学習者にとって難しいことから生じていると考えられる。

また、特定の文法表現との組み合わせにおいて、可能形式の過剰使用が多数見られる（計 23 例）。

（10）作文（040）／学習歴 1 年 3 ヶ月／過剰：

そして、李さんは家を<買える→買う>ため、徹夜までして仕事をしました。

（11）感想文（0093）／学習歴 4 年／過剰：

人々は自分の好みなどによって<選べる→選ぶ>ことができ、また、都合が悪くなった場合はほかの選択肢もある。

例(10)のように、「ため(に)」の前で可能形式を用いる誤用が 12 例見られる。「ため(に)」の前に状態を表す表現は現れず、可能形式も使用できない。同じく目的を表す「よう(に)」の前では可能形式が使えるので、これと混同した可能性がある。また、例(11)の「可能動詞+ことができる」のような可能形式の重複も見られる(11 例)。これは日本語母語話者でも話し言葉で起こしうる誤用である。

これらの文法表現は、可能動詞と組み合わせることができないが、学習者はその判断ができておらず、誤用と判定されている。このような誤用は、これらの文法表現の規則の習得が不十分なのか、可能動詞の習得が不十分なのかを判別することが難しい。

### 3.2.3 成立条件に関わらず見られる誤用

次は、可能構文の成立条件を満たしていない場合と満たしている場合の両方で、つまり可能構文で広く見られる誤用の分析を行う。具体的には、「かもしれない」、「にちがいない」、「だろう」が表す可能性、必然性、推量といった認識のモダリティを表そうとする誤用である(計 108 例)。

(12) 修論(0079) / 学習歴 6 年か 6 年以上 / 過剰 :

しかし、政治関係の悪化は文化交流に悪い影響をあたえ、さらには交流を<阻止できる→阻止する>かもしれない。

(13) 修論(0078) / 学習歴 6 年か 6 年以上 / 過剰 :

各カテゴリーの意味構造と統語構造の相関関係を明らかにすれば、対象言語間の異同の本質部分が顕著に<なれる→なる>。

(14) 作文(0065) / 学習歴 1 年 / 過剰 :

今年はずっと一生懸命にならなければならないですが、きっと日本語がもっと上手になる<ことはできます→○>でしょう。

(15) 作文(0203) / 学習歴 1 年 / 過剰 :

そうしたら、私は学校の学長に<なれます→なります>。

(16) 作文(0081) / 学習歴 1 年 / 過剰 :

だぶん、週に 1 回電話します<ことができます→○>。

先の〈表 7〉に示した 274 例の「過剰」の誤用のうち、例(12)、(13)のような非情物主語を取る構文での誤用が 100 例中 48 例、例(14)のような有情物主語の無意志動詞構文

での誤用が 38 例中 17 例、例 (15)、(16) のような有情物主語の意志動詞構文での誤用が 136 例中 43 例ある。

例 (12) ~ (16) には、必要のない可能形式が現れているが、これは、中国語の可能の助動詞“会”には可能形式として用いられる場合と認識のモダリティ形式として用いられる場合があり、この後者の用法を日本語に適用することで過剰使用が生じていると考えることができる。さらに、中国語の可能構文では主語の有生性と動詞の意志性に制限がない。したがって、このタイプの誤用は母語である中国語の負の転移により生じていると考えられる。

例えば、次の例 (17)、(18) の中国語の助動詞“会”は対応する日本語の文にも可能動詞が現れるケースであるが、例 (19) ~ (22) の助動詞“会”は認識のモダリティを表しており、対応する日本語の文には「~かもしれない」のような可能性の認識を表すモダリティ形式や「きっと」、「たぶん」のような蓋然性判断を表す副詞が現れているか、例 (22) のように、有標の形式が現れず、無標形式で認識的判断を表している。

Wǒ huì tánqín yě huì chàng gē  
(17) 我 会 弹 琴 也 会 唱 歌...../あたしピアノも弾けるし、歌もうたえます.....

『轮椅上的梦/車椅子の上の夢』

Xiàng tā men huì bào qíngkuàng nà me tā xiǎng kùnnán jiù huì hěnkuài jiějué de  
(18) 向 他们 汇报 情况, 那么, 她 想 困难 就 会 很快 解决 的。

/かれらに状況を報告する、そうすれば、困難はすぐに**解決**できるだろうに。

『青春之歌/青春の歌』

Zhè zhǒng chābié yě xǔ huì niàng chéng jiānrui de máodùn  
(19) 这 种 差别, 也许 会 酿 成 尖锐 的 矛盾...../こうした差異は、鋭い矛盾

をひき起こす**かもしれない**...

『钟鼓楼/鐘鼓楼』

Wǒ gǎn shuō yīngxióng de mèimèi yí dìng huì shēn shòu gǎndòng shuō bú dìng yě huì lián yè gěi wǒ xiě xìn de  
(20) 我 敢 说, 英雄 的 妹妹 一 定 会 深 受 感 动, 说 不 定 也 会 连 夜 给 我 写 信 的。/彼女も、**きっと感動**して徹夜で返事を書いてくれ

るぜ。

『轮椅上的梦/車椅子の上の夢』

Zhè shì jīn tiān gāngāng yìn chū lái de bào zhǐ tā dà gài hái bú huì zhī dào...../この新聞、今

刷

り上がったばかりだから、**たぶん**まだ**知らない**と思う.....

『轮椅上的梦/車椅子の上の夢』

(22) Rén de xīnlíng yě shì xū yào hū xī de bù tūn bù tǔ jīngshén jiù huì zhì xī.  
 人的 心灵 也 是 需要 呼吸 的。不 吞 不 吐，精神 就 会 窒息。

／心だって呼吸が必要なのよ。吸いも吐きもしなかったら、精神は窒息してしまう。

『人啊，人／ああ、人間よ』

本稿で取り上げた可能動詞や助動詞「(ラ) レル」のような日本語の可能形式は、能力可能・状況可能／潜在可能・実現可能は表せるが、認識のモダリティ形式としては使われない。一方、中国語では、日本語の可能形式に相当する助動詞“会”が、例(17)～(18)のように可能を表すだけでなく、例(19)～(22)のように、認識のモダリティを表すこともできる。これらは、具体的には〈表8〉のような対応関係になっている。

〈表8〉日中両言語における可能および認識のモダリティの文法的手段

言語	文法的手段	能力可能・状況可能／ 潜在可能・実現可能	認識のモダリティ
中国語	“会”のような可能を表 示する助動詞	○	○
日本語	可能動詞・助動詞「(ラ) レル」・ことができる	○	×

このような対応関係に基づけば、学習者は、母語である中国語の助動詞“会”の用法に影響を受ける形で、日本語においても、認識のモダリティを表す形式として可能形式を過剰使用していると分析できる。

### 3.3 格助詞の誤用

次に、作文コーパスにおける可能構文の格助詞「ヲ→Y」「ニ→Y」型誤用（「格助詞の誤用」、「格助詞の誤用＋述部の誤用」）のパターンは、次の〈表9〉のようになる。

〈表9〉誤用のパターン（「格助詞の誤用」、「格助詞の誤用＋述部の誤用」）

誤用のパターン		定義	誤用例 <sup>11</sup>
ア. 格助詞 の 選 択 や 使 用 の ミ ス	a. ヴォイスによる誤用	可能形式（可能動詞・助動詞「(ラ)レル」・「ことができる」）にあわせた格助詞の選択ができていない。	著者の研究によって、主人公のイメージと内容を分析して、耽美主義〈ヲ→ガ〉理解できる。（卒論）
	b. 述部における格助詞の過剰使用	漢語サ変動詞における格助詞の過剰使用。	日常生活、勉強、仕事において、至る所にすべて他人を尊重〈ヲ→〇〉することができます。（作文）
	c. 動詞による誤用	元の動詞にあわせた格助詞の選択ができていない。	その中の大原郡の阿用郷の目の一つの鬼は日本〈ニ→デ〉確認できる最古の鬼である。（卒論）
イ. 格助詞 と 述 部 の 二 重 の 誤 り	a. ヴォイスが影響した誤用＋述部の誤用	a1. ヴォイスに応じた格助詞選択の誤用＋述部の誤用	人民元数円で何日分もの林檎〈ヲ→ガ〉〈買えられる→買える〉。（感想文）
		a2. ヴォイスの誤用の添削に伴った格助詞の修正	どうすれば災害〈ヲ→ガ〉〈防ぐ→防げる〉のか。（感想文）
	b. 述部における格助詞の過剰使用＋述部の誤用	漢語サ変動詞における格助詞の過剰使用に加え、可能形式も間違っている。	この法律の登場により、主婦は辞職以外に、選択〈ヲ→〇〉する〈〇→ことができる〉。（卒論）
	c. 動詞による誤用＋述部の誤用	元の動詞にあわせた格助詞の選択ができておらず、可能形式も正しく使われていない。	だれもがこんな環境の中〈ニ→デ〉〈暮らしたら→暮らしたら〉幸せな感じが出てくるんです。（感想文）

上記のうち、ア a、ア b、ア c は「格助詞の誤用」で、イ a、イ b、イ c は「格助詞の誤用＋述部の誤用」である。

ア c、イ c は可能構文に現れてはいるものの、可能形式が直接的に関係した誤用とは考えにくい。また、ア b、イ b も直接ヴォイスが原因となった誤用かどうかは明らかではない。さらに、イ a2 は添削者の助動詞の添削に伴って格助詞が修正されたものであるため、学習者自身の誤用とは認められない場合がある。以上のことから、真にヴォイスに関わる格の交替を原因とした誤用と見られるのは、ア a、イ a1 である。

<sup>11</sup> 格助詞と述部の誤用箇所が付与されている研究タグは省略し、格助詞の誤用タグと正用タグはカタカナで表記している。タグ中の「〇」は左側（誤用タグ）の格助詞が不要であることを表す。

なお、可能構文において、述語動詞が他動詞の場合、「ガ、ガ」構文と「ガ、ヲ」構文のどちらでもよい可能性がある。それに、もともと可能構文の対象格標示としての「ヲ」と「ガ」の選好性には個人差もあるので、母語話者の判断でもゆれる。そのため、「ヲ→ガ」の誤用例の中には、真の誤用とは言えない例が存在する可能性があるが、ここではすでに付与されている正誤タグに従った。

可能構文における「ヲ→Y」「ニ→Y」型誤用（「格助詞の誤用」、「格助詞の誤用+述部の誤用」）の全体像は次の〈表 10〉のようになる。

〈表 10〉 誤用の全体像（「格助詞の誤用」、「格助詞の誤用+述部の誤用」）

誤用の種類	「ヲ→Y」型	「ニ→Y」型	計
総数	121 例	67 例	188 例
ヴォイスに関わる誤用	63 例 (52.10%)	9 例 (13.43%)	72 例 (38.30%)

「ヲ→Y」型誤用のうち、ヴォイスに関わる誤用が約 5 割あるのに対し、「ニ→Y」型誤用では、約 1 割にとどまることが明らかになった。

以下では、ヴォイスに関わる誤用に焦点を当て、可能構文における「ヲ」「ニ」の誤用の具体例を示し、その実態と原因を考察していく。

まずは、格助詞「ヲ」「ニ」の順に、「格助詞の誤用」(ア)を分析していく。

### 3.3.1 「ヲ→Y」型誤用

可能構文における格助詞「ヲ」の誤用のうち、ヴォイスに関わる誤用であるア a のパターンの分布は、次の〈表 11〉の通りである。

〈表 11〉 可能構文におけるヴォイスに関わる「ヲ」の誤用 (ア)

誤用のパターン			誤用例数
ア	a	ヲ→ガ (43)、ヲ→ハ (3)	46

ア a の誤用では、特に「ヲ→ガ」パターンの誤用が一番多く見られる (43 例/46 例)。

まず、「見える」、「分かる」、「聞こえる」、「できる」のような語彙的な可能動詞にヲ格を使っている誤用例が見られる。(19 例/43 例)

(23) 感想文 (006) / 学習歴 2 年半 / ア a :

子供が唐詩を朗読する声<ヲ→ガ>聞こえた。

(24) 卒論 (0087) / 学習歴 3 年半 / ア a :

読者は、これを詳しく読んだとき、その美しい画面から無限の想像<ヲ→ガ>できた。

これは、語彙的な可能動詞にはガ格を取ることに對する理解が不十分であることにより生じている誤用だと考えられる。なお、例 (24) のように、「できる」の前に対象を表す名詞句がくる場合、「ガ」で表されるのが標準的であるが、学習者は「できる」に對する能動文の動詞である「する」が取るヲ格をそのまま用いたとも考えられる。

次に、主語が不特定な場合など、一般的な事柄を叙述する可能構文でのヲ格の使用が多数見られる (19 例 / 43 例)。

(25) 感想文 (0167) / 学習歴 4 年 / ア a :

つまり、同じ金額の貨幣でより多くのもの<ヲ→ガ>買えるようになるのです。

例 (25) のように、可能構文において、一般的には、述語動詞が他動詞の場合、主語と対象格の格パターンは「ガ, ガ」と「ガ, ヲ」のどちらでもよい可能性がある。市川 (1991:12) は、主語が不特定な場合など、一般的な事柄を叙述する可能構文の場合、対象格標示として、「ガ」が「ヲ」よりあらわれやすい、と指摘している。学習者のこの場合の格の交替の必要性に對する理解が不十分であることが誤用の一つの原因だと考えられる。その結果、学習者は、特定の事柄を叙述しているという印象を与えてしまうことを意識していないと考えられる。

### 3.3.2 「ニ→Y」型誤用

可能構文における格助詞「ニ」の誤用のうち、ヴォイスに関わる誤用であるア a のパターンの分布は、次の〈表 12〉の通りである。

〈表 12〉可能構文におけるヴォイスに関わる「ニ」の誤用 (ア)

誤用のパターン			誤用例数
ア	a	ニ→ガ (2)、ニ→〇 (2)、ニ→ノ (2)	6

ア a の誤用では、まず、「ニ→ガ」パターンの誤用が、少数だが観察された。これは、  
1.1.2 節で提示したような「ニ、ガ」構文と「ガ、ヲ」構文の混同だと考えられる。

(26) 作文 (0659) / 学習歴 2 年 / ア a :

ここで、皆さん<ニ→ガ>自分の幸せを見つけられることを祈ります。

(27) 作文 (0049) / 学習歴 1 年半 / ア a :

先生<ニ→ガ>晩御飯を食べられない。

他動詞の可能構文の主語はニ格を取る場合があるが、この場合は目的語はガ格を取らなければならない、例えば、「太郎に英語の本が読める」では、主語「太郎」がニ格を取ると同時に、目的語「英語の本」はガ格を取る。このことへの理解が不十分であるのが例 (26)、(27) のような誤用の原因だと考えられる。なお、このような例は「ヲ」の誤用とも解釈できるが、ここは「ニ」が修正されている。

次に、「ニ→〇」、「ニ→ノ」パターンの誤用も同数、観察された。

(28) 作文 (116) / 学習歴 2 年半 / ア a :

こんな苦痛に強い恐怖を持っている私<ニ→〇>は、どうやって成長できるか。

(29) 作文 (062) / 学習歴 1 年半 / ア a :

そのまま放っておけば、地球は人間<ニ→ノ>住めないところになる恐れがある。

例 (28) と例 (29) はいずれも自動詞の可能構文で、主語には「ハ／ガ」(例 (29) の正用「ノ」は「ガ」相当) を取るべきであるが、ニ格への過剰な交替が起こっている。一般的には、自動詞の可能構文の主語はニ格を取らないことへの不十分な理解が誤用の原因だと考えられる。

### 3.4 格助詞の誤用+述部の誤用

次に、格助詞「ヲ」「ニ」の順に、「格助詞の誤用+述部の誤用」(イ) を分析していく。

#### 3.4.1 「ヲ→Y」型誤用+述部の誤用

可能構文における格助詞「ヲ」の誤用のうち、ヴォイスに関わる誤用であるイ a1 のパターンの分布は、次の〈表 13〉の通りである。

〈表 13〉可能構文におけるヴォイスに関わる「ヲ」の誤用（イ）

誤用のパターン			誤用例数
イ	a	a1	ヲ→ガ (13)、ヲ→モ (2)、ヲ→ハ (1)、ヲ→ニ (1)
			17

イ a1 の誤用では、特に「ヲ→ガ」パターンの誤用が一番多く見られる（13 例／17 例）。まず、3.3.1 節で示した例と同様の「見える」、「分かる」、「聞こえる」、「できる」のような語彙的な可能動詞にヲ格を使っている誤用例が見られる。（7 例／13 例）

(30) 作文 (0080) / 学習歴 1 年半 / イ a1 :

ワンピースを通じて、日本人が懂れていること<ヲ→ガ>良く<分かれる→分かる>。

(31) 作文 (0014) / 学習歴 1 年 / イ a1 :

図書館の窓から、山の景色<ヲ→ガ><見えます→見えます>、素晴らしいです！

これも、語彙的な可能動詞にはガ格を取ることに對する理解が不十分であることにより生じている誤用だと考えられる。述部では、「分かる」、「見える」はすでに可能の意味が既に語彙的に組み込まれた動詞であるため、可能の助動詞「(ヲ)レル」が「過剰」と判定されている。

次に、これも 3.3.1 節で示した例と同じく、主語が不特定な場合など、一般的な事柄を叙述する可能構文でのヲ格の使用も見られる（4 例／13 例）。

(32) 感想文 (0200) / 学習歴 4 年 / イ a1 :

人民元数元で何日分もの林檎<ヲ→ガ><買えられる→買える>。

主語が不特定な場合など、一般的な事柄を叙述する可能構文の場合、格の交替（ヲ格からガ格への交替）が必須であることに對する不十分な理解が誤用の一つの原因だと考えられる。「買えられる」には「可能動詞+助動詞（ヲ）レル」という 3.2.2 節で見たものと同様の可能形式の重複が現れている。

### 3.4.2 「ニ→Y」型誤用+述部の誤用

可能構文における格助詞「ニ」の誤用のうち、ヴォイスに関わる誤用であるイ a1 のパターンの分布は、次の〈表 14〉の通りである。

〈表 14〉可能構文におけるヴォイスに関わる「ニ」の誤用（イ）

誤用のパターン				誤用例数
イ	a	a1	ニ→ハ (2)、ニ→ガ (1)	3

イ a1 の誤用では、「ニ→ハ」、「ニ→ガ」パターンの誤用が少数だが、観察された。

(33) 8 級試験 (0079) /  $\phi$  / イ a1:

学生たちは純粹で、私の生活<ニ→ハ>楽しくくなれる→なる>と思う。

まず、3.3.2 節で分析したように、例 (33) は自動詞の可能構文のため、主語には「ハ／ガ」を取るべきであるが、ニ格への過剰な交替が起こっている。一般的には、自動詞の可能構文の主語はニ格を取らないことへの理解が不十分であることが誤用の原因だと考えられる。また、述部では、3.2.3 節で分析したのと同様の、認識のモダリティを表す形式として可能形式を過剰使用している誤用が起こっている。これも母語の負の転移によるものと考えられる。

#### 4. おわりに

本稿では、『YUK タグ付き中国語母語話者日本語学習者作文コーパス 2015』Ver. 5 を用いて、中国語を母語とする日本語学習者の可能構文で見られる可能形式と格助詞「ヲ」「ニ」の誤用を調査・分析し、以下のことを明らかにした。

- ① 中国語を母語とする日本語学習者の可能構文における可能形式の誤用（「述部の誤用」）は、「欠如」、「過剰」、「混同」、「その他」という四つのパターンがある。
- ② 可能形式の誤用（「述部の誤用」）は、「過剰」、「欠如」のパターンで起こりやすい。また、可能構文の意味分類で見た場合、「状況可能」と「実現可能」の意味を表す可能構文の誤用が多い。
- ③ 可能構文における可能形式の「過剰」のパターンの誤用は、可能構文の成立条件を満たしていない場合（138 例）と満たしている場合（136 例）に分類できる。前者のケースでは自動詞・他動詞の使い方や選択に関わる誤用が、後者のケースでは実現可能の過剰使用と特定の文法表現との組み合わせにおいての可能形式の過剰使用が目立つ。前者のケースの誤用の原因としては、可能構文の成立条件の習得不足が考

えられ、母語（中国語）の負の転移が疑われるものもある。後者は実現可能の使用の可否の判断が学習者にとって難しいことと、特定の文法表現の規則の習得不足あるいは可能動詞の習得不足とにより生じていると考えられる。さらに、二つのケースに共通して、可能表現を用いて認識のモダリティを表そうとする誤用が見られる。この主な原因は母語の負の転移であると考えられる。

- ④ 可能構文における格助詞「ヲ」「ニ」の誤用（「格助詞の誤用」、「格助詞の誤用＋述部の誤用」）では、ヴォイスに関わる誤用は特に「ヲ→ガ」パターンが多数見られた（56例／63例）。主語が不特定な場合など、総称的で不特定な事柄を叙述する可能構文の場合、ヲ格からガ格への交替が必須であることに対する不十分な理解と、語彙的な可能動詞にはガ格を取ることに對する不十分な理解が主な誤用の原因だと考えられる。一方、「ニ」の誤用では、もともと誤用例数も少なく、ヴォイスに関わる誤用の割合も比較的に低い。

本稿で明らかにした誤用の実態から、中国語を母語とする日本語学習者の可能構文における可能形式の誤用（「述部の誤用」）では、特に日本語の可能構文の成立条件の習得不足と、可能形式と認識のモダリティ形式の混同が目立つ。また、格助詞「ヲ」「ニ」の誤用（「格助詞の誤用」、「格助詞の誤用＋述部の誤用」）のうち、格の交替をすべき場合とその必要がない場合との混乱が目立つ。このため、日本語の可能構文の規則（成立条件、格の交替など）と学習者の母語（中国語）に配慮した可能構文の指導の工夫が必要であると考えられる。

本稿では可能構文における可能形式の誤用（「述部の誤用」）のうち、「欠如」、「混同」、「その他」のパターンについて扱うことができなかったが、今後はこれらの誤用も詳しく分析していく必要がある。

## 言語資料

于康（2015）『YUK タグ付き中国語母語話者日本語学習者作文コーパス 2015』Ver. 5  
北京日本学研究中心（2003）『中日対訳コーパス第一版（CD-R1）』

## 参考文献

市川保子（1991）「可能動詞の助詞に関する一考察」『筑波大学留学生教育センター日本語教育論集』6、pp. 1-17、筑波大学

- 市川保子（1997）『日本語誤用例文小辞典』、凡人社
- 小泉保・船城道雄・本田晶治・仁田義雄・塚本秀樹（1989）『日本語基本動詞用法辞典』、大修館書店
- 渋谷勝己（1993）「日本語可能表現の諸相と発展」『大阪大学文学部紀要』33-1、大阪大学
- 寺村秀夫（1982）『日本語のシンタクスと意味Ⅰ』、くろしお出版
- 日本語記述文法研究会（2009）『現代日本語文法 2—第3部 格と構文・第4部 ヴォイス一』、くろしお出版
- 封小芹（2005）「可能の意味を含む有対自動詞の産出的能力の習得—中国語を母語とする学習者を対象にした調査に基づいて—」『ことばの科学』18、pp. 143-162、名古屋大学言語文化研究会
- 望月圭子（2009）「中国語を母語とする上級日本語学習者によるヴォイスの誤用分析—中国語との対照から—」『東京外国語大学論集』78、pp. 85-106、東京外国語大学
- 山岡政紀（2003）「可能動詞の語彙と文法的特徴」『日本語日本文学』13、pp. 1-36、創価大学
- 山口明穂・秋本守英（編）（2001）『日本語文法大辞典』、明治書院
- 王忻（2008）『中国日语学习者偏误分析（新版）』、外语教学与研究出版社

（おうしんねい・熊本大学社会文化科学研究科博士後期課程）